

「生成“私”」

ひとりごとの存在を知ったのは、課内の仲良しお姉様から「ひとりごとの依頼きた？」の一言だった。バックナンバーを読んでみると、皆さん本当に上手にまとめていて、

「小説家みたいやん、私には書かれへんわ〜」と思っていた矢先、翌日には依頼が回ってきた。もともと喋るのは好きなほうだが(今さらながら大阪出身なので関西弁も出てしまう)、文章をまとめると途端に迷子になる自分。「や、やるしかないよな〜」と苦手意識を押しやり、3月号の執筆を引き受けることにした。

どうしようかと悩みながら迎えた週末、友人とのランチでこの話をしてみたところ、「AIに作ってもらったらええやん!」と言われ衝撃を受けた。私が「こういうのって自分の言葉で書くもんじゃない?」と返すと、IT関係の友人が「まず、書きたいテーマをざっくり伝えて枠だけ作ってもらったらええねん」と教えてくれた。

生成AIは教育分野でも導入が進んでおり、文部科学省も「初等中等教育段階における生成AIの利活用に関するガイドライン」の中で、概要や基本的な考え方、場面ごとに押さえるべきポイントを示している。研修中にICTを活用した学校を視察した際には、子どもたちが調べ学習でAIを積極的に使っている様子を実際に見ることもできた。

職場でも、同報メール用のマクロをAIに作ってもらったり(偉そうに書いてるが、実際に使いこなしていたのはメンター)、委員の先生方への案内メールを丁寧な文章に整えてもらったり(乱用しすぎて「AIに作ってもらったでしょ?(笑)」とバレた)と、AIに助けられる場面が増えている。手間のかかっていた作業がぐっと短くなり、事務の効率も上がった。

友人の言葉を思い出し、一気に気が楽になった私は、早めに書き始め、いまに至る。実を言うと、ここまでの文章は自分自身で生み出した文章である。いわば、“生成SN”である。全然おもしろくない。でもこういうのもひとりごとの醍醐味じゃないだろうか。

本当はこれまでの研修を振り返ったり、残り2か月の東京生活についてしみじみ綴ろうと思っていたのだが。おかしい。やはり“生成SN”。まとまりがない。限界を感じる。

生成AIも万能ではなくて、間違えることもある。「ん?どうした?」って言いたくなる返しのときもある。そんなときは、ただ受け取るんじゃなくて、「そうじゃなくてこう」と伝え直しながら使っていく必要があると感じている。これは学校でも同じで、AIとうまく付き合う力は子どもにも大人にも求められている。

気を取り直して、東京生活も残り2か月。さてさて、どこに出掛けようか。

あ、そうや、生成AIに最高のプランでも組んでもらうか。

(S・N)

